

# 中世インドの詩論書『首飾り』(Ekāvalī) 研究序説

柴 優人

## 1 本稿の目的

中世インドの詩論家ヴィディヤーダラ (Vidyādhara, 13 世紀から 14 世紀) が著した『首飾り』(Ekāvalī) は、自身の庇護者ナラシンハ (Narasimha) 王に対する賛嘆詩を謳いながら詩学理論を例証する、暗示派 (dhvani school) の詩論書である<sup>1</sup>。本書には、大註釈家マッリナータ (Mallinātha, 14 世紀から 15 世紀) に帰せられる註釈書『中央石』(Tarala) が残されている他、先行する詩論家たちとは異なる視点から展開される論説など、詳細な分析に値する内容の存在を認めることができる。しかしながら、インド古典詩学研究において『首飾り』は、本稿第 5 節で示すように、限られた先行研究しか存在せず、今日まで推重の視線が向けられて来たものではない。

そこで、本稿では、今後の『首飾り』研究進展に資する有益な足掛かりを提供することを目的とし、『首飾り』研究に関する基礎情報を概観、整理し、今後為されるべき研究の方向性を指摘する。これをもって『首飾り』研究序説とする。

## 2 作品の概要

ヴィディヤーダラが著した『首飾り』は、アーナンダヴァルダナ (Ānandavardhana, 9 世紀) やアビナヴァグプタ (Abhinavagupta, 10 世紀) らによって確立された暗示派詩学の詳説を主題とする詩論書であり<sup>2</sup>、偈頌と自註から成る全 8 章で構成されている。

| 章番号 | 章名  | 総詩節数 |
|-----|---|------|
| 1   | 「暗示の確立」(dhvanivyavasthāpana)                    | 13   |
| 2   | 「言葉と意味の確定」(śabdārthanirūpaṇa)                   | 13   |
| 3   | 「暗示の種類」(dhvanibhedanirūpaṇa)                    | 1    |
| 4   | 「暗示対象が従属要素となっている詩の確定」(guṇībhūtavyaṅgyanirūpaṇa) | 6    |
| 5   | 「詩的美質の確定」(guṇanirūpaṇa)                         | 13   |
| 6   | 「詩的欠陥の確定」(doṣanirūpaṇa)                         | 8    |
| 7   | 「言葉の装飾の確定」(śabdālaṃkāranirūpaṇa)                | 6    |
| 8   | 「意味の装飾の確定」(arthālaṃkāranirūpaṇa)                | 76   |

この構成内容から示唆されるように、詩論家ヴィディヤーダラは、先行する暗示派の詩論書であ

<sup>1</sup>インド古典詩学における学統については Kane 1971: 355–391 を参照せよ。

<sup>2</sup>註釈者マッリナータによると『首飾り』の主題 (viśaya) は「詩文の特徴」(kāvyalakṣaṇa) である。当該説明の詩文とは、暗示を主要素とする詩文を指示している。EĀ 1.6 : dhvanipradhānam kāvyam tu kāntāsaṃmitam iritam | śabdārthau guṇatām nītvā vyañjanapravaṇam yataḥ || 「一方で、暗示を主要素とする詩文は、愛する女に等しいものであると言われている。何故ならば、言葉と意味を従属させた上で、専ら、暗示作用を為すからである」 Tarala on EĀ 1.7 (15.16–19): kāntāsaṃmitalakṣaṇam kāvyalakṣaṇam ity arthaḥ | etena kāvyalakṣaṇam viśayaḥ | tajjñānam prayojanam | tayoh sādhyasāadhanabhāvaḥ sambandhaḥ | tajjijñāsur adhikāriti svagranthasyānubandhacatuṣṭayaṃ sūcitam | 「愛する女に等しいものの特徴というのは、詩文の特徴であるという意味である。この表現によって、詩文の特徴というのが主題 (viśaya) であることになる。それ (詩文の特徴) を理解させることが目的 (prayojana) である。その両者 (詩文の特徴とその理解) には、達成関係 (sādhyasāadhanabhāva) が存在する。それ (詩文の特徴) を知ろうと欲する者が、有資格者 (adhikārin) である。というように、自身の作品の創作四項目 (anubandhacatuṣṭaya) が示唆されている」

るマンマタ（Mammaṭa, 11世紀）著『詩文の光』（*Kāvyaṣaṣṭā*）に依拠して本書を著している<sup>3</sup>。しかしながら、自身の庇護者ナラシンハ王に対する賛嘆詩を謳いながら、詩学理論を例証する『首飾り』は<sup>4</sup>、この種の作品の先駆を為すものであり、その後『首飾り』の著述形式を範型とした、詩論書をはじめとする様々な学術書が著された<sup>5</sup>。以下の言明では、ヴィディヤーダラ本人によって『首飾り』の著述形式が説明され、その理由が述べられている。

EĀ 1.7 : eṣa vidyādharaṣ teṣu kāntāsammitalakṣaṇam |

karomi narasiṁhasya cāṣṭuslokān udāharan ||

この私ヴィディヤーダラは、ナラシンハ王に対する賛嘆詩の数々を例文として用いながら、それら（諸教示書）の内<sup>6</sup>、愛する女と等しいもの（詩文）<sup>7</sup>の定義づけを行う。

EĀ 1.8 : antareṇa narasiṁhabhūpatiṁ netaro 'sti mama vāṇmayocitaḥ |

candracūḍam apahāya jāhnavīvāri voḍhum aparah ka īśvaraḥ ||

ナラシンハ王を除いては、私の秀句（vāṇmaya）に相応しい他の者は存在しない。シヴァ神（月を頭頂に頂く者）を除いて、他の誰が、ガンジス川の水流を保持し得ようか<sup>8</sup>。

上に示されたような『首飾り』の方法は、後に世に出る論書の模範対象となったということから、その高い影響力が看取される。著述形式の他にも、Mishra 2005: 68が指摘するように、先行する著名な詩論家たちとは異なる視点から展開する論説も『首飾り』には存在する。例えば、第1章冒頭部で展開されるマンガラ論や、第2章の言語機能論で示されるマンマタ批判、第3章の情趣（*rasa*）論で為されるボージャ（Bhoja, 11世紀）批判などがそれに相当する<sup>9</sup>。

<sup>3</sup>『首飾り』と『詩文の光』の章構成の比較検討については Trivedī 1903: xi–xii を参照せよ。

<sup>4</sup>Kane 1971: 292が言及する、『首飾り』内の例文全てがヴィディヤーダラによって創作されたものであるという記述は誤りである（Kane 1971: 292: “The peculiarity of this work is that all the examples are composed by Vidyādhara himself and contain panegyrics of his patron, king narasiṁha of Utkala [or Orissa].”）。というのも、『首飾り』の特徴である、例文をナラシンハ王への賛嘆詩として提示する試みは情趣論部では為されていないからである。その理由としてヴィディヤーダラは、自身の王に対する賛嘆詩を提示する場合、詩人の欲望の感情が主要素となる為、情趣とはならない、と言う。svavṛtti on EĀ 3.1 (100.1–3): cāṣṭuṣu prabhuviṣayasya ratyākhyasya kavibhāvasya prādhānyam bhaviṣyatīti rasādihvaneḥ prādhānyaprakāśanāya parakīyaṇy evāsmābhiḥ padyāny atra krameṇodāhriyante | 「諸々の賛嘆詩において、王を対象とする恋と呼ばれる詩人の感情が主要素となるだろう。それ故、暗示される情趣などが主要素となることを照らし出す為、他ならぬ他者が創作した韻文を、ここで順に我々は例示する」

<sup>5</sup>上述した『首飾り』の著述形式を範型として著された学術書については Gupta 1992: 9にまとめられている。その中でもヴィディヤーナータ（Vidyānātha, 14世紀）著『プラターパルドラ王の名声の装飾』（*Pratāparudrayaśobhāṣaṇa*）という詩論書は著名である。

<sup>6</sup>ヴィディヤーダラは、先述箇所（EĀ 1.3–1.6）で、教示書（śāstra）に関する三つの分類を示している。

<sup>7</sup>マンマタ著『詩文の光』に見られる同様の表現については川村 2017: 6, 70–71 を参照せよ。

<sup>8</sup>マッリナータは、ナラシンハ王を賛嘆する詩を例文に使用する際に想定され得る反論を示している。Tarala on EĀ 1.8 (16.7–9): nanu raghurāmādīn purātanān puruṣadhaureyān upekṣya kim ity ādhunikam puruṣam adhikaroṣīty āśaṅkyāha | antareṇeti | purātanatvam aprayojakam | guṇanidhitvaprayojakagarimādīnā tu narasiṁho rāmādīn atīseta iti bhāvah | 「【反論】ラグやラーマなどといった古の優れた人々を無視して、一体何故、当代の人（ナラシンハ王）を貴方は【称赞】対象としているのか。【答論】という【反論を】懸念して述べる、**antareṇa** 云々と。古さというのは、【称赞を】促す要因ではない。しかしながら、功德の宝庫たる性質を誘因とする威厳さなどに基づいて、ナラシンハはラーマなどを超えているのである、ということが意図されている」

<sup>9</sup>勿論、『首飾り』が暗示派詩学の系統に属する詩論書である限り、先行する詩論書からの影響も看取される。例えば、Kane 1971: 293や Winternitz（中野義照訳）1966: 23が言うように、『首飾り』の詩的装飾定義には、ルイヤカ（Ruyyaka, 11世紀）著『装飾大全』（*Alaṅkārasarvasva*）に対する傾倒が見られる。

さらに、『首飾り』に対する古典註の作者にマッリナータがいることも無視してはならない<sup>10</sup>。マッリナータは古典サンスクリット文学史における権威的な七つの詩作品に対する註釈者として名高い学匠である。そんな彼が『首飾り』に註釈書を著しているという事実は、この作品が、当時のインド古典詩学界における重要作品の一つとして一定の権威を有していたことを裏付けている<sup>11</sup>。

以上のように、中世インドの詩論書『首飾り』は、当時のインドにおける宮廷文化の一側面を反映させた作品であるという点と<sup>12</sup>、インド古典詩学史の構築にとって看過し得ないものである点において、精査する価値がある。

<sup>10</sup>インド南東部に位置するアーンドゥラ(Āndhra)地方出身の学匠マッリナータについてはNarasimhacarya 2002、Lalye 2009を参照せよ。

<sup>11</sup>マッリナータによる註釈書『中央石』には、古典サンスクリット文学史における権威的な七つの詩作品に対する解説の中では論じられていない視点や議論が散見される(Cf. Battistini 2018: 151)。Lalye 2009: 16–19が示すように、マッリナータに帰せられている註釈書は多々存在する。それら全てが同一人物であるかについては未だ不明な点が多いが、古典サンスクリット文学七作品に対する註釈書の著者マッリナータと『首飾り』に対する註釈者マッリナータは同一人物と認められている。その根拠として『中央石』の冒頭偈の一つとして提示される以下の詩節の存在がある。

Tarala's opening verse 4: vāṇīm kāṇabhujīm ajīgaṇad avāsāsīc ca vaiyāsikīm  
antastantram aramsta pannagavīgumpheṣu cājāgarīt |  
vācām ācakalad rahasyam akhilam yaś cākṣapādasphurām  
loke 'bhūd yadupajñam eva viduṣām saujanyajanyam yaśaḥ ||

カナブジュの言葉を考察し、ヴィヤーサの言葉を確定し、中間に学ぶ学術書(聖典解釈学論書)を楽しみ、パンナガ(パタンジャリ)による言葉の連続に視線を投げかけ、アクシャパーダから弾き出た諸々の言葉の秘密を完全に説き明かし、彼によって初めて知らされたもの(upajña)こそが、世間で、賢者たちの間で名声—人徳さから生み出されるべき—となった…。

この詩節は、カーリダーサ(Kālidāsa, 4世紀から5世紀)著『クマラーの誕生』(Kumārasambhava)、『ラグの系譜』(Raghuvamśa)、バーラヴィ(Bhāravi, 6世紀)著『キラータとアルジュナの戦い』(Kirātārjunīya)、マーガ(Māgha, 7世紀から8世紀)著『シシュパーラの殺害』(Śiśupālavadhā)、バツティ(Bhatti, 6世紀から7世紀)著『バツティの詩文』(Bhattikāvya)、ヴァラダラージャ(Varadarāja, 12世紀)『論理家の擁護』(Tārikarakṣā)に対するマッリナータ註の冒頭偈でも提示されているものである。当該詩節の内容についてはRoodbergen 1984: 7, 370–371を、upajñaという語についてはRoodbergen 1984: 372を参照せよ。

<sup>12</sup>宮廷詩人と庇護者の関係性を特徴づける一側面—詩人の詩作仕事の報酬として得る、庇護者からの莫大な富—を示す詩節が『首飾り』にある。

EĀ 1.11: kṛtvā kāvyam avāpa viśvamahitām kīrtim kavigrāmaṇih  
śrīharṣaḥ śriyam adbhutam hariharo lebhe 'rjunakṣmābhujah |  
mrtyos trāsam apācakāra malayakṣmāmaṇḍalākhaṇḍalas tat  
kiñ cin na vilokyate na kila yat kāvyāt samunmīlati ||

至高の詩人であるシュリーハルシャは、詩文を創作した後、一切の者から尊崇される程の栄誉を獲得した。ハリハラは、アルジュナ王から驚く程の富を手に入れた。マラヤ山の大地の領域を治める王は、死の恐怖を克服した。詩文から花開いて明らかにならないものは、何ら見られない(何も存在しない)と言われている。

その他、中世インドの宮廷詩人と庇護者の相互扶助関係が如実に現れ出ているものとして、詩論家ラージャシェーカラ(Rājaśekhara, 9世紀から10世紀)が謳う、有名な詩節がある。

KM (27.7–10): khyātā narādhipatayaḥ kavisaṁśrayena  
rājāśrayena ca gatāḥ kavayaḥ prasiddhim |  
rājñā samo 'sti na kaveḥ paramopakārī  
rājño na cāsti kavinaḥ sadṛśaḥ sahāyaḥ ||

王たちは、詩人に依拠して世に名が知れ渡る。そして、詩人たちは、王に依拠して有名になる。詩人にとっての最高の扶助者として、王に等しい者はなく、そして王にとって、詩人に等しい協力者は存在しない。

### 3 著者情報

#### 3.1 年代

『首飾り』の著者ヴィディヤダラは、インド中東部にある現在のオリッサ（Orissa）州周辺を統治していたカリंगा（Kalinga）国の君主であるナラシンハ王の庇護下で活躍していた宮廷詩人である。彼の年代は13世紀中葉から14世紀前半の間に位置づけられている。そのヴィディヤダラの生存年代を決定する一要因として、彼の庇護者ナラシンハ王に関する年代論がある。Gupta 1992: 5はヴィディヤダラを庇護していた王として、ナラシンハと称される四人の王を候補として列挙する<sup>13</sup>。それらのうち、ヴィディヤダラの庇護者は、13世紀から14世紀に統治していたナラシンハ王（1280年から1314年統治）であると結論づける<sup>14</sup>。そのナラシンハ王年代論の他に、ヴィディヤダラが、ビルハナ（Bilhaṇa, 11世紀）著『王女カルナスンダリー』（*Karṇasundarī*）の詩節から引用していることや、14世紀に活躍した詩論家シンハブーパーラ（*Simhabhūpāla*, 14世紀）が『情趣の大海を照らす月』（*Rasārṇavasudhākara*）でヴィディヤダラを批判することからも、ヴィディヤダラの年代は推察される<sup>15</sup>。さらに、マツリナータに帰せられる註釈書『中央石』の存在もヴィディヤダラの年代決定に寄与している。

#### 3.2 著作

彼は詩論家としての著作『首飾り』の他に、『遊戯秘事』（*Kelirahasya*）という性愛学論書（*kāmaśāstra*）をも残していることが確認されている<sup>16</sup>。『遊戯秘事』は全18章構成である<sup>17</sup>。Śrīrāmacandruḍu 1981: 4によれば、インド三大性典の一つであるコーッコカ（*Kokkoka*, 11世紀から12世紀）著『性愛秘事』（*Ratirahasya*）を要約した作品である<sup>18</sup>。Gupta 1992: 8によると、それらの他にもカーリダーサ（*Kālidāsa*, 4世紀から5世紀）著『ラグの系譜』（*Raghuvamśa*）、『クマーラの誕生』（*Kumārasambhava*）、マーガ（*Māgha*, 7世紀から8世紀）著『シシュパーラの殺害』（*Śiśupālavadha*）、シュリーハルシャ（*Śrīharṣa*, 12世紀）著『ニシャダ王の事績』（*Naiṣadhīyacarita*）に対する註釈書も著しているようであるが、それらは散逸しているため内容を確認することはできない。

#### 3.3 信仰

Gupta 1992: 5によれば、ヴィディヤダラ在世当時のオリッサ地方は、ヴィシュヌ教が優勢であった<sup>19</sup>。しかしながら、ヴィディヤダラは敬虔なシヴァ教徒であるとGupta 1992: 5は言う。

上記の詩節から理解できるように、庇護者たる王とそれに仕える詩人の関係は相補的な扶助関係と言える。すなわち、有能な詩人を側に置くことで、彼の優れた詩作能力で以って、王の名声の伝播に拍車を掛ける。そして、その見返りとして王から富を獲得し、優れた詩作の結果として名声も博することになる。

<sup>13</sup>Mishra 1983: 2-3もGupta 1992: 5と同様の統治年代を想定しているが、Trivedī 1903: xxは、それらとは少し異なる見解を提示している。Trivedī 1903: xx: “Narasimha-deva I. 1229 A.D. to 1262 A.D. Narasimha-deva II. 1280 A.D. to 1314 A.D. Narasimha-deva III. 1338 A.D. to 1362 A.D. Narasimha-deva IV. 1388 A.D. He was reigning in 1397 A.D.”

<sup>14</sup>Trivedī 1903: xvi-xxiii、Mishra 1983: 2-22、Gupta 1992: 5-8を参照せよ。

<sup>15</sup>Cf. Pollock 2016: 271-275 and RS (297.17-298.7).

<sup>16</sup>管見によれば『遊戯秘事』の校訂刊本は存在しない。Trivedī 1903: xvによればベンガルの図書館に写本として現存している。

<sup>17</sup>Cf. Trivedī 1903: xv, Śrīrāmacandruḍu 1981: 3-4.

<sup>18</sup>性愛学者コーッコカと『性愛秘事』についてはWinternitz（中野義照訳）1973: 187を参照せよ。

<sup>19</sup>Kane 1971: 297は、同時代のオリッサ地方、カリंगा国の宮廷で活躍した詩論家ヴィシュヴァナータ（*Viśvanātha*, 14世紀）がヴィシュヌ教徒であったことを指摘している。

それはおそらく、EĀ 1.1 の祈願文がシヴァ神に向けられていることに起因している。

EĀ 1.1: prāleyācalakanyakākucataṭīpatrāvalīśilpinaḥ  
preṅkhabhāvilocanānalaśikhāniṣpīacetobhavaḥ |  
devasyenduvibhūṣaṇasya suciraṃ pādāravindadvayaṃ  
yuṣmān pātu surāsureśvaraśiroratanāṃsukiñjalkitam ||

パールヴァティー(雪山の娘)の乳房の傾斜部に模様を描く芸術家であり、額の[怒りに]震える第三の眼から[放たれた]炎によってカーマ神を飲み尽くした、月に飾られし神(シヴァ)の両足という蓮華—インドラ(神々の王)とラーヴァナ(悪魔たちの王)<sup>20</sup>の頭頂の宝石の光によって花卉が開いた—は、貴方たち(註釈者と学習者)を永遠に守りたまえ。

上記の祈願文のみからヴィディヤダラがシヴァ教徒であったと結論づけるのは早計だろうが、少なくともシヴァ神に対する敬虔な態度があったことは確かである。

#### 4 刊本情報

ここでは『首飾り』の刊本情報について述べる。これまでに出版された『首飾り』の諸刊本の中には、現在入手困難となっているものも存在する<sup>21</sup>。それらのうち、現在筆者が参照可能な『首飾り』刊本として Trivedī 1903、Śrīrāmacandruḍu 1981、Mishra 1983、Avasthī 1990、Tripathi 1996 の五点が挙げられる<sup>22</sup>。そのうち、Trivedī 1903、Śrīrāmacandruḍu 1981、Mishra 1983 は、マッリナータ註が付されている刊本である。Avasthī 1990 には『首飾り』本文とヒンディー註『灯明』(*Dīpikā*)が付いており、Tripathi 1996 は現代パンディットによるサンスクリット註とヒンディー註が付されている刊本である。

Trivedī 1903 は現在参照可能な『首飾り』刊本の中で最も古く、管見の限りではあるが、全体的に信頼度の高い刊本である<sup>23</sup>。校訂作業には七本の写本を用いており、マッリナータ註についても二本の写本を用いた校訂を為している<sup>24</sup>。Mishra 1983 は、Trivedī 1903 と三本の写本を使用して校訂を行なった刊本である<sup>25</sup>。Śrīrāmacandruḍu 1981 も、Trivedī 1903 や Mishra 1983 と同じくマッリナータ註付きの刊本であるが、校訂の際に使用したと思われる写本情報などが提示されていないという問題がある<sup>26</sup>。しかし、Śrīrāmacandruḍu 1981 に提示されている『首飾り』のテキストには、校訂者(Pullela Śrīrāmacandruḍu)による修正案が括弧を用いて示されている。その点、『首飾り』を読み進めていく際の手掛かりを適宜与えてくれるものとして有益な資料ではある。

上記三つの刊本の序説には、『首飾り』や著者ヴィディヤダラに関する基礎情報が提示されている。その中でも Trivedī 1903 には、序説の他に notes と題する簡素な解説が校訂テキストの後に付されている。

<sup>20</sup>Avasthī 1990: 3 の註釈に基づく。

<sup>21</sup>『首飾り』刊本に関する書誌情報については Cahill 2004: 15–16 に大方まとめられているが、Tripathi 1996 の参照が欠けている。

<sup>22</sup>以上の刊本の他に、Cahill 2004: 16 によれば、テルグ語で著された註釈書『マードヴァ註解』(*Mādhavīyavivṛti*)が付されたものが存在する。しかし、当該資料は筆者未入手である。

<sup>23</sup>筆者は本稿執筆時、『首飾り』第1章に対する訳註作業を完了している。定本にしたものは Trivedī 1903 である。筆者は、現段階では写本との整合を試みていないが、Trivedī 1903 の読みでは読解不可能な箇所が散見された。Trivedī 1903 の刊本も多少の修正が必要であると思われる。

<sup>24</sup>Trivedī 1903 が校訂の際に使用した写本の情報については Trivedī 1903: iii–vii を参照せよ。

<sup>25</sup>Mishra 1983 が校訂の際に使用した写本の情報については Mishra 1983: 1–2 を参照せよ。

<sup>26</sup>Śrīrāmacandruḍu 1981 は、序論の記述から推察されるに、Trivedī 1903 やテルグ語註付きの刊本を参照している可能性が高い。

『首飾り』の偈頌と自註、さらにヒンディー註『灯明』を掲載している刊本として Avasthī 1990 がある。当該刊本にも写本情報は提示されていない。しかし、校訂テキストの脚注には複数写本を参照している形跡が見られる。Avasthī 1990 には『灯明』という名のヒンディー註が提示されている。その内容は、一般的な註釈書で為される字義の解説というより、ヒンディー訳に近い<sup>27</sup>。ただし、逐語的な訳ではないようである。

マッリナータ註以外のサンスクリット註が掲載されている刊本として Tripathi 1996 がある。Tripathi 1996 は参照可能な『首飾り』刊本の中で、最も新しいものである。しかし、Tripathi 1996 にも Avasthī 1990 と同様、写本情報は提示されていない。しかし、Tripathi 1996 には、現代パンディットによるサンスクリット註、ヒンディー註、そして部分的な英訳が与えられており、参照に値する<sup>28</sup>。

## 5 先行研究

先ず第一に、『首飾り』の存在を世に知らしめる先行資料として、インド古典詩学全体を見渡す代表的な研究書である Gerow 1977、De 1988、Kane 1971 がある。それらは基本的に『首飾り』という詩論書の概略や、その作者ヴィディヤダラを中心に据えた簡素な説明を為すものである（Gerow 1977: 280、De 1988: 205–208、Kane 1971: 292–293）。尚、以上のようなインド古典詩学に関する概説書のほとんどは、多かれ少なかれ『首飾り』に対する言及を施している。それ故、以下では先行する関連資料の中でも比較的詳細な説明を与えるものや、重要な視点から『首飾り』を扱うものにのみ言及し、それらの内容を概観、整理する。

### 5.1 『首飾り』全体を扱う研究

ここでは先ず初めに、『首飾り』全体を俯瞰する研究として Gupta 1992 が挙げられねばならない。それが示す『首飾り』の全体像と、その論題や章ごとに提示された各情報は『首飾り』研究において非常に有用なものである。しかし、そこでは『首飾り』本文の翻訳が提示されていない他、マッリナータ註に関する参照情報も乏しいものがある。それと同種の内容を提示する先行資料として Mishra 2005 がある。Mishra 2005 も Gupta 1992 同様、『首飾り』全体の概要を簡潔に描き出すものであり、翻訳やマッリナータ註についての記述は殆ど見受けられないが、その内容の簡便さや参考資料として提示される他の詩論書との関連記述は重要なものである。そして、以上二書の基盤として据え置かれているであろう Trivedī 1903 の存在も無視してはならない。先述したように、Trivedī 1903 には付録として『首飾り』全体に対して俯瞰的、且つ概略的な解説が提示されている。幅広い視野のもとに為される概説やそこに示される関連資料は、『首飾り』研究にとって参照必須なものであろう。

### 5.2 『首飾り』各論題に対する個別的研究

『首飾り』における各論題を主題に据えた個別的研究としては、先ず Pollock 2016: 247–256 がある。Pollock 2016 は、インド古典詩学や演劇論で論じられる情趣理論を広範囲に取り扱う研究書であり、その中で、『首飾り』第3章で示される情趣理論の解説とその大部分の翻訳が提示されて

<sup>27</sup>おそらく Gupta 1992: xi が示すヒンディー訳付き刊本は Avasthī 1990 のことであろう。Gupta 1992: xi: “I have not come across with any such work, devoted to the study of either Vidyādhara or his magnum opus Ekāvalī. I have recently seen an edition of Ekāvalī with a Hindi translation.”

<sup>28</sup>Tripathi 1996 で示される註釈書群は、ブリグナータパーンデーヤ (Bhṛṅunāthapāṇḍeya) と称される現代パンディットによるものである。

いる。しかしながら、マッリナータ註についての言及は僅かなものであり、翻訳についても抜粋訳に留まっている<sup>29</sup>。『首飾り』の情趣理論部については、Roodbergen 1984: 375でも、その一部が英訳されている<sup>30</sup>。Roodbergen 1984には、その他にも、『首飾り』が与える詩的装飾(alamkāra)の定義に対する英訳が提示されている。そこでは、マッリナータ註に対する訳も部分的に提示されているが、ヴィディヤーダラやマッリナータが詩的装飾を論じる際に展開する詳細な議論内容にまで踏み込んだ訳註は付されていない。しかし、その一部提示された信頼度の高い翻訳作業は『首飾り』の詩的装飾研究の促進に寄与し得るものである。上記二書と同じく、『首飾り』における個別的論題に視点を向けた論を展開するものとして Battistini 2018がある。Battistini 2018は、インド古典詩学書で屢々議論される「詩文の成熟」(kāvyapāka)と呼ばれる概念を取り扱う研究論文である。そこでは、「詩文の成熟」論が提示される代表的な詩論書の該当テキストと英訳が提供されており、その一つとして示される『首飾り』該当箇所に対する訳や概要が提示されるだけでなく、マッリナータ註に対する言及や訳出も為されている<sup>31</sup>。

管見の限りであるが、以上に示した三つの先行研究の他に『首飾り』の各論題を比較的詳しく取り扱ったものは存在しない。それはおそらく『首飾り』という詩論書自体に対する注目度が他の詩論書と比べ希薄であることに起因しているだろう。独自性や影響力を有していた『首飾り』の研究促進の爲にも、他の詩論書との照合や『首飾り』自体の翻訳を含む、より一層精密な研究が今後為されるべきである。

## 6 結語

これまで述べてきた『首飾り』研究序説をまとめて、今後果たされるべき研究の方向性を述べる。

先ず最も重要な作業は基本的な訳註研究の遂行である。その際に常に注目すべき点は、ヴィディヤーダラの前後に活躍した詩論家たちの議論を押さえた上で、彼の論説にどのような特徴的な視点があるのかを検討することである。その際参照に値するものがマッリナータによる註釈書である。マッリナータ註の参照は『首飾り』の深い理解に資するだけではなく、マッリナータが独自に展開する新たな議論の発掘につながるだろう。さらに、それら『首飾り』とマッリナータ註の言葉の節々から浮かび上がってくる、王と詩人の関係や、当時の宮廷における文学の在り方を示唆するような言明に注意を払うことも『首飾り』研究の持つ一つの意義である。研究を遂行していく中で現代パンディットの解釈やヒンディー語による註釈書の参照も有益である。ただし、マッリナータを含む註釈家たちが与える解釈を無批判に鵜呑みにすることは避けなければならない。ヴィディヤーダラ本人が意図したことを汲み取る姿勢が肝要である。

上記で示したような視点を持って遂行される『首飾り』研究は、中世インドの宮廷文化が育んだインド古典詩学の研究に新たな章を設けることになると筆者は確信している。

<sup>29</sup> マッリナータ註における情趣理論については Lalye 2009: 63–67 による紹介がある。

<sup>30</sup> Roodbergen 1984 は、パーラヴィ著『キラータとアルジュナの戦い』第1章から第6章までに対する訳註研究であり、マッリナータ註に対する訳註も含む。Roodbergen 1984の付録(Roodbergen 1984: 526–564)には、詩論書で展開される詩的装飾の定義に対する翻訳と略説が提示されている。その中に、『首飾り』第7章と第8章で示される詩的装飾の定義が紹介されている。

<sup>31</sup> Battistini 2018: 151: “Vidyādhara treats *pāka* in the first section of his work, while discussing the causes of poetry, namely *abhyāsa*. His contribution is nothing else more than an almost literal reprise of previous literature. As often happens, the most interesting insights come from the commentator, Mallinātha, who conciliates *pāka* with *śayyā* and provides an example of his own to illustrate the theory. The whole passage is much indebted to Rājāśekhara.”

## 略号及び参考文献

EĀ: Vidyādhara's *Ekāvalī*. See Trivedī 1903.

KM: Rājaśekhara's *Kāvyamīmāṃsā*. See Dalal and Sastry 1934.

RS: Simhabhūpāla's *Rasārṇavasudhākara*. See Venkatacharya 1979.

*Tarala*: Mallinātha's *Tarala*. See Trivedī 1903.

Avasthī, Brahma Mitra

1990 *Vidyādhara-kṛta-ekāvalī Brahma-mitra-avasthī-kṛtayā Dīpikā-hindīvyākhyayā samalaṅkṛtā*.  
Dillī: Indu Prakāśana.

Battistini, Alessandro

2018 "When poetry is ripe: An overview of the theory of kāvyapāka." In *A World of Nourishment: Reflections on Food in Indian Culture*, edited by Cinzia Pieruccini and Paolo M. Rossi, Leditzioni: Ledi Publishing, 45–58.

Cahill, Timothy C.

2004 *An Annotated Bibliography of the Alaṅkāraśāstra*. Varanasi: Indica Books.

Dalal, C. D. and R. A. Sastry

1934 *Kāvyamīmāṃsā of Rājaśekhara*. Baroda: Oriental Insitute, 1916. Revised and enlarged by K. S. Ramaswami Sastri Siromani, 1934.

De, Sushuil Kumar

1976 *History of Sanskrit Poetics*. Calucutta: Firma K. L. Mukhopadhyay, 1960. Reprint, 1976.

Gerow, Edwin

1977 *Indian Poetics. A History of Indian Literature Volume V, Fasc 3*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Gupta, Savitri

1992 *Comparative and Critical Study of Ekāvalī*. Delhi: Eastern Book Linkers.

Kane, Pandurang Vaman

1971 *History of Sanskrit Poetics*. Bombay, 1951. Fourth edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1971.

Kawamura, Yūto (川村 悠人)

2017 『バツティの美文詩研究—サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法学—』法蔵館

Lalye, P. G.

2009 *Mallinātha: Makers of Indian Literature*. New Delhi: Sahitya Akademi, 2002. Reprint, 2009.

Mishra, Pramilla

1983 *Ekāvalī by Vidyādhara (with Tarala Commentary of Mallinātha)*. Orissan Oriental Text Series, No. 16. Orissa, Bhubaneswar: Directorate of Tourism, Sports & Culture.

Mishra, Sucheta

2005 "Ekāvalī: A Critical Study." PhD diss., University of Utkal.

Narasimhacarya, N. C. V.

2002 *Mallinātha: A Study*. Rasthriya Sanskrit Vidyapeetha Series, No. 84. Tripati: Rasthriya Sanskrit Vidyapeetha.

Pollock, Sheldon

2016 *A Rasa Reader: Classical Indian Aesthetics*. New York: Columbia University Press.

Roodbergen, J. A. F.

1984 *Mallinātha's Ghaṅṭhāpatha on the Kirātārjunīya I–VI, Part One: Introduction, Translation and Notes*. Laiden: E. J. Brill.

Śrīrāmacandruḍu, Pullela

1981 *Ekāvalī of Vidyādhara with the Commentary Tarala of Mallinātha*. Hyderabad: Department of Sanskrit, Osmania University.

Tripathi, R. K.

1996 *Vidyādharakṛtā-ekāvalī-saralāṅkā*. New Delhi: Rāṣṭriya Sanskrit Sansthāna.



Trivedī, Kamalāśaṅkara Prāṇaśaṅkara

1903 *The Ekāvalī of Vidyādhara with the Commentary Tarala of Mallinātha and with a Critical Notice of Manuscripts, Introduction and Critical and Explanatory Notes.* Bombay Sanskrit Series, No. 63. Bombay: Government Central Book Depôt.

Venkatacharya, T.

1979 *The Rasārṇavasudhākara of Śiṃhabhūpāla.* Madras: The Adyar Library and Research Centre.

Winternitz, Moritz (中野義照訳)

1966 『インドの純文学』(=インド文献史第5巻) 日本印度学会

1973 『インドの学術書』(=インド文献史第6巻) 日本印度学会

(しば ゆうと、広島大学大学院博士課程前期 [インド哲学])

## An Introduction to the Study of the *Ekāvalī*

SHIBA Yūto

This paper is intended as a preliminary survey of the *Ekāvalī* ‘Necklace’, a poetic treatise (*alaṃkāraśāstra*) of the Dhvani school, composed by Vidyādhara in medieval India. Vidyādhara flourished around the 13th and 14th centuries under the patronage of King Narasiṃha of Kaliṅga. His poetic work *Ekāvalī* consists of verses and an auto-commentary (*svavṛtti*) thereto; and there exists another commentary on both of them: *Tarala* ‘Central Gem’ by Mallinātha (ca. 14th–15th c. CE).

The *Ekāvalī* comprises the following eight chapters:

| chapter names   | verse numbers |
|---|---------------|
| 1 Establishment of Suggestion ( <i>dhvanivyavasthāpana</i> )                                    | 13            |
| 2 Determination of Word and Meaning ( <i>śabdārthanirūpaṇa</i> )                                | 13            |
| 3 Determination of the Varieties of Suggestion ( <i>dhvanibhedanirūpaṇa</i> )                   | 1             |
| 4 Determination of the <i>guṇībhūtavyaṅgya</i> Type of Poem ( <i>guṇībhūtavyaṅgyanirūpaṇa</i> ) | 6             |
| 5 Determination of Poetic Qualities ( <i>guṇanirūpaṇa</i> )                                     | 13            |
| 6 Determination of Poetic Defects ( <i>doṣanirūpaṇa</i> )                                       | 8             |
| 7 Determination of the Ornaments of Sounds ( <i>śabdālaṃkāranirūpaṇa</i> )                      | 6             |
| 8 Determination of the Ornaments of Meanings ( <i>arthālaṃkāranirūpaṇa</i> )                    | 76            |

Although it is true that Vidyādhara is much indebted to his antecedents, his treatise is not merely a patchwork of the various poetic theories that had already been presented and discussed by his predecessors. He occasionally develops new arguments from new perspectives and hence his work is worth a close examination in whole. Nevertheless, surprisingly few attempts have been made so far to examine this treatise. There remains much to be done. A full-scale study of this poetic work will give fresh impetus to the study of Sanskrit poetics in India.